

宗教倫理学会第23回学術大会プログラム

2022年10月29日(土)

オンラインにて

9:05 入室開始

9:25 開会の辞

【研究発表(午前の部)】

司会: 那須 英勝

9:30~10:00 発表者① 奥山史亮(北海道科学大学)

10:05~10:35 発表者② オバーク・アンドリュー(高知県立大学 OBERG Andrew)

10:35~10:45 休憩

司会: 堀内 みどり

10:45~11:15 発表者③ 林 研(大阪経済法科大学)

11:20~11:50 発表者④ 佐藤啓介(上智大学大学院実践宗教学研究科)

11:50~13:00 昼食

【公開講演(午後の部)】

司会: 氣多 雅子

13:00~14:00

講師: 鎌田東二(京都大学名誉教授)

講題: 「神道における場所と「世間」」

14:00~15:00 レスポンス(2名)・質疑応答

宮本要太郎(関西大学教授)・鬼頭葉子(同志社大学准教授)

15:00~15:05 休憩

15:05~15:30 会員総会 司会: 井上 善幸

発 表 要 旨

発表① 9:30~10:00

発表者：奥山史亮（北海道科学大学全学共通教育部）

題 目：大戦期エリアーデにおける国家統合と国民の追悼の問題

Eliade's discourse on national formation and mourning of nation in Romania during the war.

概 要：

第一次大戦後のパリ講和会議において、ルーマニアは戦勝国として参加し、トランシルヴァニア、ブコヴィナ、ベッサラビア等をはじめとする新領土を獲得した。しかしヴェルサイユ体制下のルーマニアには、多様な歴史的背景を有し、民族構成や経済発展も一様でない諸地域を国家として統合するという課題が突き付けられた。さらに第二次大戦が勃発すると、ロシアとの戦闘により、国境付近の新領土における住民が多数犠牲となった。ミルチャ・エリアーデをはじめとする大戦期の知識人たちは、ヴェルサイユ体制下における少数民族の急激な増加に対して、ルーマニアの国家統合を目的とし、その統合のための精神的文化を如何に形成するか、新領土における戦死者を国民として如何に追悼するか、という問題に取り組んだ。しかしエリアーデは国家統合の必要性を訴えながらも、大戦期のポルトガル、ドイツ、フランスの文化人たちと交友する過程において、ナショナリズムの問題をトランスナショナルな視点から語り直すことを試みるようになっていく。エリアーデの言論を分析することにより、国家統合にともなうナショナリズムと宗教をめぐる問題を考察する。

発表② 10:05~10:35

発表者：オバーク・アンドリュー（高知県立大学）

題 目：“Do Not Lead Us into Temptation”: Some Thoughts from Comparative Readings of the “Lord’s Prayer/Our Father”（「我らをこころみにあわせず」：「主の祈り」の比較読解に基づく考察）

要 旨：

The so-called “Lord’s Prayer” or “Our Father” is one of the most central and traditional prayers in all of Christianity; often learned by children and repeated throughout their lifetimes. The prayer is believed to have come from Jesus himself, in response to a question from his disciples about how they should pray; the biblical sources for this are the Gospels of Matthew 6:9-13 and Luke 11:2-4. In the most popular English translation the penultimate line reads (addressing the divine) “And lead us not into temptation” (e.g. as in the New International Version; the New Revised Standard Version has “And do not bring us to the time of trial”). Japanese translations have traditionally followed this reading, and indeed it matches the plain sense of the New Testament’s Greek (kai me eisenegethes hemas eis peirasmon). In 2000 though the Japanese Catholic Church provided its own update to the effect of 「わたしたちを誘惑におちいらせず」 something that set it off from the Protestant and Orthodox renderings. The theological implications of this line – that God might actively lead people into possibly doing what is wrong – are clear, and based on such concerns Pope Francis changed the wording in 2019 to be “do not let us fall into temptation” (interestingly matching it to the earlier altered Japanese version); however this was only immediately effective for the Italian Church and many other national groupings resisted shifting such a well-known and established prayer. Yet the biblical Gospel accounts that first initiated this ritual do not give the whole story, as an examination of the reconstructed “source” Sayings Gospel Q shows (Q34), as well as the historically vetted Gospel of Jesus (13:2-4), a document put together by the

scholars of the Jesus Seminar. In my presentation I will examine these variations and offer some analysis on the phenomenological implications for those who might engage in the repetition of this prayer.

発表③ 10:45~11:15

発表者：林 研

題 目：科学と宗教の「独立」モデルについて —プラグマティズムの観点から—

On "Independence" Model for the Relationship between Science and Religion : From A View of Pragmatism

概 要：

科学と宗教とは「対立」するものではなく「独立（分離）」の関係にあるという捉え方は、科学側からも宗教側からも一定の支持を集めており、20世紀以降の知識人の間ではある程度一般的な見解となっている。この見方は、科学と宗教とがそれぞれ異なる領域を扱う営みであると規定し、干渉・越境しない限り衝突が避けられるとする。それは、単純化するなら事実と価値（意味）とを分けて、双方に割り当てる考えである。しかし一方で、この「独立」の見解が最終解決とは言えないとも指摘される。実際、日常のなかで事実と価値が混ざり合って認識されていることは確かであり、宗教の語る事実をすべて無視して信仰が成り立つとも思えない。そこで本発表では、この「独立」モデルをいくつかの角度から素描・分析した上で、事実と価値の関係を問い直してきたプラグマティズム哲学の立場から考察を加える。そこから「独立」モデルの妥当性の範囲を見出していきたい。

発表④ 11:20~11:50

希望者：佐藤啓介（上智大学大学院実践宗教学研究科 教授）

題 目：「死者 AI（故人 AI）をめぐる倫理的・法的問題を検討する」

"Ethical and Legal Considerations on the Digital Avatar of the Dead "

概 要：

昨今、死者（故人）に関する様々なデータと AI 技術を活用することで、死者を AI として復活させるサービスが国内外で始まりつつある。こうした技術は、死者との「継続する絆」の確立に貢献する可能性がある一方、死者が権利主体としての地位を有していないため、法的に未整備の領域が多い。それ以上に、死者をめぐる倫理的議論が、伝統的宗教文化と宗教的敬虔感情に基づいて曖昧なままだったため国内外で未確立であり、この技術が死者の「尊厳」を侵害するかどうかを倫理的にも検討できる段階にないのが現状である。本発表では、死者 AI の技術的特徴を簡単に説明したうえで、それをめぐる法的議論の可能性を整理し、そのうえで、死者 AI を倫理的に論じるための論点整理を踏まえた展望を示す。同時に本発表は、「死者」のような伝統宗教が論じてきた主題を、世俗領域において論じなおすポスト世俗時代における宗教倫理の可能性の一例を示すものでもある。